
この思いはずっと・・・

銀雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この思いはずっと・・・

【Nコード】

N8762X

【作者名】

銀雷

【あらすじ】

これはFate/EXTRAのゲームを表現深く創造して作りました。何だか自分としてはかなり頑張ったのですがあまり良いと思う人も少ないかもしれませんが、是非！！、本当に一度呼んでみてくれると嬉しいです！！

（前書き）

光あれ、その言葉から始まった聖杯戦争、そして同じく光あれ、聖杯戦争が終わった。終局を迎えた時点で■は何を思う？今まで辿ってきた軌跡。本当に求めていたものとは？この闘いに意味は有ったのか？様々な思いが交差するとき、■は・・・

聖杯・・・奇跡の願望機とまで賞賛された今回の景品^{ユメ}。こんな物を巡って自分は戦ってきたのかと、そんなことが馬鹿らしく思えてしまう。

ここは聖杯の中、視界に広がるは電子の海、一面青色、一面殺風景・

「■は、この世界が作り出した欠片^{データ}の一部・・・でしかなかった、のか」

ふとそんな言葉を思いついた。自分は欠片^{データ}で有ったが故に手に入れたもの。曲がりながらも唯一の友であった、間桐慎二^{マトウシンジ}。

自らの思いを悟り、自分に決意を教えてくれた、ダン・ブラックモア。

まさか彼女と同じ、そんなちっぽけな存在だとは存在だとは思ってもいなかった、ありす。

最早人間とはかけ離れたように見えたがそれでも人間を愛してこの上なかった、ランルーくん。

決して感情は表には出さず、ただ冷酷に、ただ無慈悲に勝利だけ、否・・・好きだった人への思いに答えるために戦った、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。

作られた命と知りながらも己が目的を見定め、そして最後は必死に生きていた、ラニ＝VIEI。

そして、王としての、資格、素質、能力、そんなにも多くの物を持つていたのにただ一つだけ手に入れた無かった、そんな・・・当たり前のことに戦いで気づいた、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ

イ。

そして最後に・・・嘗ては平和の為に生き、そして戦いでしか人間は成長しないそんな悲しい結論にたどり着いた、トワイヌ・H・ピースマン。

太陽を落とした、そんな非現実的なことを大声で言い切った大酒飲みライダーの騎乗兵。

森の中でヒっそり生き誰にも愛されず孤独に生きた反騎士道の弓兵アーチャー、砂糖菓子のような甘い幻想に浸っていた魔術師キャスター。

肉を食らい、血を求め、狂乱した槍兵ランサー。

武闘を好み勝利に酔いしれた暗殺者アサシン。

至高の武人とまで見定められ裏切りによって生き、裏切りによって死んだ狂戦士バーサーカー。

かの騎士王の隣に佇み共に歩み、そして二度目の生でようやく悲願が達成できた騎士セイバー。

本当にただ一人、その障害を途中退場して、だが・・・それでも敢えて教祖となった救世主セイヴァー。

残すは一人、■とここまで二人三脚、切っても切れない縁を結び、同じ喜び、同じ悲しみを分かち合った。あの、『赤い少女』

「少女じゃないわぁー！！！！」

いきなりの顔面パンチをぐしゃりと・・・英霊であり使い魔サーヴァントで文句が多くて、駄々をこね、人嫌いが激しく、自分優先で、何とも我侭な可愛い暴君。

「ふんっ、奏者が悪いのだ・・・奏者が」
マスター

もじもじとしながら、顔を俯かせどんどん声を小さくしていく、
の相棒。^{バートナー}昔、といつてもほんの数十年前のことだが彼女がこんなことなどはしていなかった。

クラスは騎士、^{セイバー}武器は隕鉄の鎧「^{インテッノフイゴ}原初の火」^{アエストユウス}宝具は彼女の最高傑作、
彼女の思いが^{アエストユウス・ドムス・アウレア}つまった招き蕩う黄金劇場。

スキルは、^{セイバー}騎士のクラスに有るまじき低さのなんと物悲しい耐魔力。
反逆から苦勞が重なつて出来た、頭痛持ち。そして『欲しい』と思
えば短期間で手に入れることの出来る無茶苦茶な、皇帝特権。

「ハハハ・・・」

乾いた笑い、もう直ぐこんな簡単なことも忘れてしまう。いや、難
しいことだつて大事なことだつて忘れたくないことだつてみんなみ
んな、忘れてしまう。綺麗さっぱりに水に流されるの如く。

「なあ、奏者よ」

「ん？」

「余は、その、なんだ・・・どういう風に見えていた？」

彼女にしては珍しい質問。だが簡単に即答する。

「ハッキリ言つてじゃじゃ馬」

「なあ！？・・・フッフッフ、フッフッフ、奏者よそこまで軽口が叩
けるのなら心配せずにい！！」

またもや彼女の拳が迫る、だが今度は寸前でピタリと止まる。そし

て、小刻みに震える手で■の頬にそつと触れる。本当に繊細な曲線の弦がしなる様に。

「もうこれ以上やってしまったら、奏者は砂糖菓子みたいに粉々になつてしまふよな・・・だから余はもう少し奏者と共におりたい」

よくよく見れば、彼女の手もうつすら透けてきた。使い魔^{サーヴァント}としての役割を今終えようとしているのだ。これは決定事項だ、どんなに強くたつて、どんなに大きくたつて、越えられない壁はある。

「そうだね、もう少し一緒にいようか」

うつすら微笑を浮かべる、主人^{マスター}と言われる人物。この際見た目も性格もとやかく言うつもりはないが、他の人物^{モブ}からしたらよほど背景^{モブ}としが思われていない。

「第一、奏者はなんというか・・・むむむ、そうだ余の自慢だ」

エッヘンと得意そうに胸を張り、頬を緩ませ、満面の笑みでこちらに言いかける。母親か？そんなツツコミでも入りそうな感じた。

「ああ、もうじれったい！！よし！！よし！！奏者・・・」

「・・・騎士^{セイバー}？」

「なんじゃ？、って奏者？奏者どこに・・・」

そして、もう視覚では確認できないほど溶け込んでしまった主人を懸命に探す従者。

「拳を握り顔を上げよ、命運は尽きぬ」

「奏者もう一度待っているぞ。そなたの言葉を信じて、ずっと・・・」

「だって、さいごじゃないよ、またきつとあえるよ」

根拠の無い、口約束のようなもの。だが彼女にとってそれは、最後の思いだと受け取ったのかもしれない。

（後書き）

呼んでくださってありがとうございました。なんだか作者は微妙にとあるの禁書目録の『記憶が無くたってとうまはとうまだよ』な感じが出ていないかなと思いました。

コレは一切、作者の創造の産物であり、本編とはなんら関わりありません。

では、読者にもう一度・・・光あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8762x/>

この思いはずっと・・・

2011年11月7日01時11分発行